

## 「日本音楽学会国際研究発表奨励金」報告書

この度援助を受けた2つの学会発表について、報告させていただきたい。

### I. Jahrestagung der Gesellschaft für Musikforschung

#### 1. 発表学会 Jahrestagung der Gesellschaft für Musikforschung について

Gesellschaft für Musikforschung とはドイツ音楽学会のことである。その年1回の全国大会がバルト海に面したドイツ最北東の大学都市グライフスヴァルトで、9月17日から20日までの4日間にわたって開催された。学会が定めた今年度の主要テーマ「世界の転換? “Sattel“期(1750年から1870年頃)のバルト海周辺の音楽文化」(12名の個人発表と全体ディスカッション)と「リヒャルト・シュトラウスと20世紀の音楽」(8名の個人発表)の2つのシンポジウムの他、主要テーマに関連しない個別の研究発表58名(発表20分・質疑応答10分)で構成。このシンポジウムと研究発表の2本立ては、日本音楽学会の全国大会のプログラムに類似している。しかし異なるのは、これに加えて様々な研究団体や研究チームのプロジェクトの発表の他、各研究分野のグループ(“Fachgruppe”)の会合があることだ。そのグループには、「音楽理論」「民族音楽」「ジェンダー研究」「教会音楽」「音楽社会学」等がある。若手研究者によるグループ「次世代パースペクティブ」による意見交換の場もあり、学会組織のボトムアップ思考も伺える。研究発表のみならず、こうした様々な研究チームの活動報告があることで、ドイツの多様な音楽学研究の全体像を大まかに見渡せることがこの学会の利点だと感じた。個々が主張しながらも全体が上手くハモっている、まるでバロック期のオーケストラのような学会という印象である。

**2. 研究発表について** セッション名「Freie Referate 4」日時:9月19日(金)15:15~15:45 発表タイトル「Johann Rosenmüller. Ein Komponist im interkonfessionellen Kontext」発表要旨:17世紀のドイツ人作曲家J.ローゼンミュラーは、ルター派出身でありながらヴェネツィアでカトリック教会のために作品を書いた。その創作活動の中で宗派の違いは問題にならなかったのであろうか。こうした問題意識に基づいて本研究では、ローゼンミュラーのヴェネツィア期の作品を①音楽様式と調性手法の発展度合いから4つの創作時期に分類し、②同一の歌詞に書かれた詩編曲の音楽と言葉の扱い方を観察した上で、その扱い方の違いがルター及びカトリックの聖書解釈の違いに由来するのかどうかを考察した。そして③作品における聖書解釈の宗派別分類と創作時期の分類の相関関係をまとめた。その結果、ヴェネツィア期初期に書かれたと思われる詩編曲にはルター派の聖書解釈が見られ、中間期には双方の要素が示され、後期の様式を持つ作品には完全にカトリックの聖書解釈が反映されていることが明らかになった。この分析結果からは、ローゼンミュラーに信仰に対する葛藤があったかどうかを知ることはできない。しかし、少なくとも彼の音楽自体は、最終的にその宗派間の分厚い壁を乗り越えることができたと言えよう。

#### 3. 質疑応答

- ・質問「作曲年代を確定する作業や信仰に関する問題を調べる際に、手稿譜に書

かれた情報は考察されなかったのでしょうか」

- ・応答「おっしゃるとおり、手稿譜資料にある情報から手がかりを得られるならば大変良かったのですが。ローゼンミュラーの場合、ヴェネツィア期の作品には自筆譜がなく、彼の死後に他の人物によって写譜されたものしか残っておりません。そのため、手稿譜資料の情報は残念ながらほとんど手がかりとはなりません」
- ・コメント「17世紀は、作曲家及びその音楽がドイツ・プロテスタント地域やイタリア・カトリック地域を行き来することが当然だった時代ですよね」
- ・応答「確かにシュッツを代表するように17世紀のドイツ人作曲家がヴェネツィアの音楽様式を学ぶこと自体は珍しくありません。但し、私が問題としているのはローゼンミュラーが実際にカトリック教会のために作品を作る立場にあったということです。それが他のルター派作曲家と異なるローゼンミュラーが独特な点です。本研究では、より内面的な作曲家個人の信仰の問題に着目したいと考えました」

## 感想

海外の学会発表で何を学んだのか振り返って考えてみると、それはおそらく、日本人としての責任感が少し芽生えたことではないかと思う。ある教授は、これまで関わりのあった日本人研究者のことを私に嬉しそうに話して下さった。また後で分かったことだが、私のセッションの司会者や質問者は日本に滞在したことのあるドイツ人だった。こうして発表の場が与えられたのも、そうした過去の日本人の存在があつてこそと考えずにはいられなかった。ある研究者からは、日本での西洋音楽研究がヨーロッパであまり知られていないのは残念という声も聞いた。総会では、ホームページの言語を英語、フランス語、イタリア語、スペイン語に加えて、日本語でも作成する話が出ていた。すでに日本語ページの一部は公開されているようなので (<http://www.musikforschung.de/index.php/ja/>)、ぜひご覧いただきたい。ちなみに、このサイトにはドイツ語圏の学会の開催情報も載せられている。

## II. Internationales Symposium anlässlich des 300. Todestages von Philipp Heinrich Erlebach, “Die Rolle des Hofkapellmeisters in Thüringen um 1700”

### 1. 発表学会について

ドイツでは、前項のような音楽学会が主催する大規模な学会の他、大学や音楽団体が主催する個別の学会も数多く開かれる。小規模ではあるが、ある特定のテーマに見識のある研究者が集うため、専門性はより高くなる。私が参加したのは、ドイツ・プロテスタント地域の教会カンタータの発展に寄与したと考えられる P.H.エルレバッハの死後 300 周年を機に、テューリンゲン州における 1700 年頃の宮廷楽長の役割をテーマにしたシンポジウムである。中部ドイツの音楽復興団体アカデミア・ムジカリス・テューリングア（代表クリスティアン・ストルヒ博士）主催、ワイマール・フランツ・リスト音楽大学共催（顧問ヘレン・ガイヤー教授）によって、10月10日(金)ワイマール・フランツ・リスト音楽大学・大講義室、11日(土)ルードルシュタット・ハイデックス宮殿で開催された。参加者はマリア・ストラチェヴィツ博士（ワルシャワ）、クラウス・エフナー博士（アイゼナハ、元バッハ・ハウス館長）、クリティアン・アーレンス教授（ボッフム）、ステフェン・A・クリスト教授（アトランタ、USA）、ラシート・S・ペガー（ヴェルツブルク、バッハ・アルヒーフ・ライプツィヒ）、ベルント・コスカ（バッハ・アルヒーフ・ライプツィヒ）、アンド

レアス・ヴァツカット教授（ゲッティンゲン）、アンドレアス・ミュンツマイ博士（フランクフルト・アム・マイン）、ヨアヒム・クレーマー教授（シュトゥットガルト）と報告者の10名、司会（ストルヒ博士、ガイヤー教授）2人を入れた総勢12名である。個々の発表内容は先のドイツ音楽学会のWeb上で公開されているので、そちらも合わせてご覧いただきたい（<http://www.musikforschung.de/index.php/aktuelles/tagungen-kongresse/tagungsberichte/tagungsberichte-2014/887-weimar-und-rudolstadt-10-bis-11-oktober-2014>）。

2. 研究発表について 日時：10月11日（土）14:00～15:30 発表タイトル「Die in Rudolstadt überlieferte Kirchenmusik Rosenmüllers: Ein Entwicklungshorizont der deutschen protestantischen Musikgeschichte」 発表要旨：ルードルシュタット宮廷楽長P.H.エルレバッハの作品は、ヴァイセンフェルスに次いでドイツ教会カンタータの発展史に寄与したと考えられてきた。そのエルレバッハが最も数多く収集したのが、J.ローゼンミュラーのヴェネツィア期の作品である。中でも、とりわけ最新のソロ・モテット様式（レチタティーヴォ・アリアの独唱手法）や激しいアフェクト表出を示すローゼンミュラーの作品に、エルレバッハが関心を抱いていたことが分かる。その斬新さへの傾向は、むしろヴァイセンフェルス宮廷で鳴り響いたローゼンミュラー作品よりも強く見られる。ローゼンミュラーとエルレバッハの作品を比較してみると、①歌詞内容と様式の組み合わせ方②フーガ手法の点で両者に一致が見られる。さらに、ローゼンミュラーの作品にはイエスの受難を不協和音手法、音楽書式の構造、小節の長さや拍子の配分等を用いてシンメトリーの中心に置くという特徴が見られ、これはバッハの教会声楽曲にも通じるものである。このことから、ルードルシュタット宮廷に伝播されたローゼンミュラーの作品は、ドイツ・プロテスタント音楽の発展史に影響を与えた意義深きものとして位置づけられる。それと同時に、ルードルシュタット宮廷の国際色豊かな音楽環境が、ヴァイセンフェルスにおけるエポック・メイキングなマドリガル・カンタータを生む原動力になったことが、ローゼンミュラーの作品受容から示唆される。

### 3. 質疑応答

- ・質問（一般）「その当時はドイツ・プロテスタントとイタリア・カトリックの宗派がはっきりと分断されていた時代ですよ。そのような時代にイタリア・カトリックの音楽がドイツ・プロテスタント地域に受容できたことが意外です」
- ・応答（ガイヤー）「ことさら音楽に限っては、私たちが想像する以上に宗派を超えた交流がありました。園田さんの発表にもあったように、音楽様式を学ぶだけでなく、実際の礼拝でも演奏されるケースもありました。但しコンテクストを変えた形で。それについては今後もっと研究される必要がありますが」
- ・質問（ミュンツマイ）「エルレバッハが収集したローゼンミュラーの“Confitebor tibi”の不協和音程手法についてご説明されていましたよね。それは、エルレバッハの作品に特に影響を与えたとお考えでしょうか」
- ・応答（園田）「エルレバッハも不協和音程のフィギュールを使用していますが、確かにローゼンミュラーの先の“Confitebor tibi”ほど誇張した使い方はしていませんよね。但し、エルレバッハの作品はほとんど消失しているので、全ての作品を考察で



きたわけではありませんが」

- ・質問（ミュンツマイ）「私が知っている限りでは、エルレバッハの不協和音手法は、ローゼンミュラーのものとは若干異なると思われませんが」
- ・応答（園田）「不協和音程の手法が両者で異なって見えるのは、二人の生きた時代に隔たりがあることによると思います。言葉と音楽の扱いは17世紀後半と18世紀初頭では変わってきますよね。そもそも単語レベルでのフィギュール手法は18世紀になると17世紀ほどは使われなくなってきました。いずれにせよ、エルレバッハが所持していたローゼンミュラー作品の特徴と、実際にエルレバッハが用いた作曲手法には若干のずれがあって当然のことにように思います。また、この作品例には両者の影響関係というより、ルードルシュタット宮廷の音楽がヴァイセンフェルスに比べていかに斬新であったかを説明する意図がありました」
- ・質問（ストルヒ）「エルレバッハがローゼンミュラーの作品をかなり早い段階で知っていた可能性について言及されていましたが、その経緯についてもう一度ご説明いただけますか」
- ・応答（園田）「ウテ・オムンスキーは1685年にエルレバッハがヴォルフエンビュッテルでイタリアとフランスの音楽様式を学んだと述べています。1685年はローゼンミュラーの死後1年目に当たります。ヴォルフエンビュッテルで宮廷楽長をしていたローゼンミュラーの音楽は、当然そこに残っていたでしょうし、演奏されることもあったと考えられます。そこで、エルレバッハが当時著名な作曲家であったローゼンミュラーの音楽を聞いたことは自明のことにように思います。ローゼンミュラーの名は、エルレバッハと親しくしていたヴァイセンフェルス宮廷楽長のJ.P.クリーガーから聞いた可能性もあるでしょう」

## 感想

総じて言うと、この学会では非常に密度の濃い体験をさせていただいた。前述した全国大会の発表の場合、7つの研究発表が並行して行われていたことに加え、バッハ・アルヒーフのプレゼンテーションが重なっていたためか、ドイツ・バロックの専門家に聞きに来ていただけなかったことが残念ではあった。それに対して、この学会では12名と参加者が少人数のため、一人ひとりの顔と名前、そして発表内容が把握できる。他の研究者と意見交換するチャンスは、発表時以外にも十分あった。学会の開始当初は緊張感が漂っていたのが、終わる頃には共に何かを作り上げるチームのような雰囲気に包まれていた。学会終了後、プログラムに書かれていたわけでもホテルが同じわけでもないのに、参加者全員が一緒に食卓を囲んでいたことが印象的だった。そもそも学会とはこういうものではないかと思う。すなわち、自分たちの知りたいことを共有し承認する場であるということである。発表内容は数年後に本になる予定である。このチームでの作業がしばらく続くことがありがたい。

最後になぜ私がこの学会に参加できたのかについて触れておきたい。参加者はもちろん公募によって集められたものであるが、私の発表が受諾されたのはおそらく、共催者のガイヤー教授が私の留学時の指導教官であったことと無関係ではないだろう。学会で久しぶりに先生にお会いし、留学時に落ちこぼれ学生だったことをふと思い出した。しかし、その苦労の日々はどうやら無駄ではなかったようだ。